

●基本理念

「良い医療を、効率的に、
地域住民とともに」

私たちは地域住民の健康増進のため、他の医療機関や保健福祉分野と力を併せ、地域中核病院として、当地域の医療を担うと共に、さらに高度な医療に対応できるよう努力します。

SCRUM

No.58

すくらむ

発行：赤穂市民病院 〒678-0232 赤穂市中広1090番地 TEL0791-43-3222 (代) FAX0791-43-0351
編集：赤穂市民病院広報委員会

職員の「絆」をもとに 赤穂市民病院の発展を目指して

副院長 藤井 隆

未曾有の災害をもたらした東日本大震災から一年が過ぎました。改めて被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。そして亡くなられた皆様のご冥福をお祈り申し上げます。戦後最大のこの困難の中で、被災地をはじめ国民の努力によって我が国は瀬戸際から脱しましたが、復興の歩みはまだ遅く、原子力発電所の事故の影響も大きく立ちほだかっています。このような厳しい環境のなか、平成24年度の診療報酬改訂がなされ、

医科+17%、歯科+2.09%のプラス改定となりました。画期的な事と思います。急性期入院医療に重点配分し、救急・産科・小児科・外科の再建を図るとあります。病院勤務医の負担軽減、医療従事者の増員に努める医療機関への支援を重点課題として、看護師や病棟薬剤師の評価や看護補助

者や医療クランクの配置の促進などが謳われています。

赤穂市民病院が抱える課題

今日、赤穂市民病院での運営、経営上の最大の懸念は地方の中核病院共通の問題である医師、看護師不足です。

医師不足の実態は診療科と地域の偏在です。平成16年からの初期臨床研修制度がきっかけになったと考えられています。研修医が大学の医局に属さずに市中の病院で研修できるようになり、大学の医局が医師不足となった結果、地方の病院に医師を派遣できなくなり、大学からの派遣を頼りにしていた地方の基幹病院が医師不足になりました。また研修医が各科をローテーションで研修するようになり、医学部卒業時に憧れ・使命感で選んでいた診療科を今は研修医が2年間の研修後に各診

療科の労働環境も見て選ぶようになり、内科・外科・小児科・産科・救急科は相対的に医師数が減少しています。そして都市部での生活を望む若い医師が多くなってきました。

また地方の看護師不足に拍車をかけたのは、平成18年に導入された新看護基準です。今まで患者10人に対して看護師1人の割合(10:1)で看ていた基準を、7人に対して1人(7:1)に変更したもので、その基準を満たしている病院には高い診療報酬を支払う制度です。都市部の大病院がこぞって7:1に向かい、看護師を全国規模で集めたため、地方の病院は取り残され10:1のままです。ますます仕事がつくなり、看護師が来ないといった状況が生じています。

本院が今後いかにして医師、看護師を集めるかが病

院の将来を決めるといっても過言ではありません。言い換えれば本院が医師、看護師等の職員に選ばれる病院になる必要があります。

第二期構想の実現に向けて

本院は新病院に平成10年に移転して14年目になります。その後数々のマイナーチェンジやソフト面での改善はなされましたが、ハード面での対応が限界になりつつあります。



数年前、母が病気になった。甲状腺のがんだった。すぐ大学病院で手術をする事となり、甲状腺を摘出した。親戚のおばちゃんから「オカンが死ぬ前にハワイに行きたいって言いよるよ」ということになり、親戚と母とハワイ冥土のみやげツアーに出発。ワイキキで大フィーバーした母は元氣そのものだったが、おばちゃん足骨折した。僕は母ではなくおばちゃんを背負って日本に帰ってきた。

術後もカラオケ、ボクササイズと着々と遊びの幅を広げ、すっかり元氣になった。とにかく母は活発で一日中笑っている陽気な人間だ。

母は病院通いを続けていたが、最近になって手術当初から懸念されていた事態になった。がんが再発し、大きくなったのである。そのため、ここ一年くらい時々夜中に呼吸困難で死にかけた事がある。さすがの母もコレにはこたえたようだ。あれだけ元氣だったのだから。僕は母に言った、

「大丈夫、なんとかなるって、頑張れ」と。自分でも言っていることがよくわからなかったが、コレといった名文句も出てこないの、とりあえず家を出た。その夕方、僕が家に帰ってくると、母とおばちゃん、そして友達と三人で夕食を作りながら大騒ぎしていた。「よー考えたらね、悩んでも仕方ないわ!!」と笑っていた。恐るべき精神力である。我が母親ながら、あっぱれと感心した。

後日、東京から父がやってきた。この人が来るくらいなので、母の病氣は重たいのだと再認識する。父に会うのは五年ぶりだ。とはいっても、そもそも、僕が生まれてからすぐに父と母は別居しているの、今まで合計五十回くらいしか会ったことがない。もつとあるかもしれないが、記憶がない。父は無口で変わり者で、昔インドに行ったきりの生活をしていたり、休日には愛車か日本刀をみがく侍みたいな人である。

キング・カズ調のグラサンに毛皮のダウンを羽織った父が新神戸駅に到着。久しぶりに見た父はやっぱり老けていた。家族三人が何年かぶりに再結成した形になった。

その日、三人で外食しようということになったが、僕は少し照れくさかった。近所の親戚や知り合いなんかをたくさん呼んだら、みんな父にビビっていた。

夜、珍しい光景を見た。僕はいつものようにコンビニで週刊誌を立ち読みしていた。すると、そこに、僕がいるとも知らない父と母がふたり並んで入って来た。カゴを母が取ってふたりでコンビニの中を歩いていた。僕は週刊誌で顔を隠しながら何を買っているのかをのぞいていた。爽健美茶とみたらしだんごを買っていた。何度かしか見たことのない、夫婦らしい姿である。母はがんのくせにとっても楽しそうだった。

私の愛読書

「Twilight (トワイライト)」 ステファニー・メイヤー (ヴィレッジブックス)



アメリカワシントン州へ引っ越してきた17歳の高校生ベラと、そこで彼女が出会ったヴァンパイア・エドワードとの許されない恋を描いた物語です。そこにベラの幼馴染の狼男ジェイコブが関わる三角関係にそれぞれの種族の掟が絡んで・・・といった展開で、ベラが次々と事件に巻き込まれ、ドキドキハラハラ、読み始めると止まりません。

『ハリー・ポッター』シリーズに次ぐ世界第2位のベストセラーで、映画にもなり、全米にヴァンパイアブームを巻き起こした大人気シリーズです。友人に勧められて試しに一冊読んでみたらこれが面白い！日本語版の刊行が待ち切れず、原書を取り寄せ一気に読みました。敵に狙われるベラを必死に守ろうとするエドワード、彼を巻き込みたくないために1人立ち向かうベラ。危険と隣り合わせの運命を背負いながら、信じ合い、種族の壁を乗り越えて惹かれ合う2人。エドワードを想うがゆえに死をも厭わない彼女の勇気に感動です。相手を想うあまりに苦悩しつつも互いの人生においてかけがえのない存在になっていく、そんな過程が丁寧に表現されています。また、それぞれのキャラクターについても詳しく書かれており、家族愛や友情など盛りだくさんな内容で、単なるファンタジーではなく奥が深い小説だと思います。登場人物は皆個性があり魅力的で、最後まで飽きることなく楽しめます。翻訳本は全13巻。現実から離れて、夢とロマンの世界を味わいたい方にはお薦めのシリーズです。

(医療課 柳生 千明)